

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

トータル・フィアーズ ~THE SUM OF ALL FEARS~

2002 (平成14) 年8月18日鑑賞

Data

監督：フィル・アルデン・ロビンソン

出演：ベン・アフレック／モーガン・フリーマン／ジェームズ・クロムウェル／シアラン・ハインズ／ブリジット・モイナハン

👁️👁️ みどころ

トム・克蘭シー原作の一連のジャック・ライアン映画の決定版。1973年の第4次中東戦争の際撃墜されたイスラエル軍戦闘機に積まれていた小型の核爆弾が偶然発見され、某グループの手に。そして29年後の今、ロシアはチェチェンに毒ガス兵器を使用した。次は核兵器か・・・？急逝したロシア大統領の後を引き継いだ新大統領ネメロフとアメリカ大統領ファウラーとの息づまる神経戦。ファウラーを支えるCIA長官キャボット、そしてそのキャボットの手足となって知力の限りを尽くして献身的な貢献を続けるジャック・ライアン。よく練られたストーリーとスリリングな展開。そして誰もがアッと驚く、スーパーボウルに熱狂する満員のスタジアム内での本当の核爆弾の爆発。こんな生々しい「きのこ雲」を見れば観客はその恐怖にかたずをのむ筈だ。そして結末は・・・？本当に皆さんにおすすめしたい超A級作品。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ジャック・ライアンシリーズの最新作>

『THE SUM OF ALL FEARS』とは直訳すれば恐怖（恐れ）の合計（総計）。それを日本語タイトルでは『トータル・フィアーズ』とした。英語のわかる人には何となくイメージがわかるかもしれないが、何とも中途半端なカタカナ英語。この映画の原作は、トム・克蘭シー原作のジャック・ライアンシリーズの最新作『恐怖の総和』。ならばいっそのこと、この映画も『恐怖の総和』と日本語タイトルにした方がスッキリとしてわかりやすかったのではないだろうか・・・。

ジャック・ライアンシリーズの第1作は、有名な『レッド・オクトーバーを追え！』だ。

第1作ではジャック・ライアンを、アレック・ボールドウィンが演じたが、私にはロシアの原子力潜水艦の艦長マルコ・ラミウスを演じたショーン・コネリーの方が印象が強かった。本作品ではジャック・ライアンを、『アルマゲドン』（98年度作品）や『パール・ハーバー』（01年度作品）で、今や押しも押されぬハリウッドの若手大スターとなったベン・アフレックが演じている。

ジャック・ライアンはCIAの新米の分析官。しかし彼はとびきりの分析力をもっていた。とくにロシアの次期大統領の予測についての彼の分析は的確で、現職大統領の急逝とともにライアンの予測通りネメロフ（シアラン・ハインズ）が新大統領に就任した。

新米のライアンを抜擢したのはCIA長官のキャボット（モーガン・フリーマン）。これはまさに適役。ファウラー大統領（ジェームズ・クロムウェル）の隠れた右腕として、アメリカ合衆国の運命を左右する要職を担う人物にピッタリ。知的でクール、しかし行動的でかつ経験豊富。そして人を見る目もしっかりしており、ユーモアのセンスもある。恐いけど、ある意味では理想的な上司だ。

<居眠りする若いアベック>

前宣伝が良かったためか、客席は満杯状態。若いアベックも多い。しかし若いヤツらには導入部はちょっと難しいかも……。したがって、

① 1973年の第4次中東戦争でアメリカの核を積んだイスラエル軍の戦闘機がゴラン高原で撃ち落とされたこと

② 長い間砂漠の砂に埋もれていたその核爆弾が偶然発見され、不発弾としてわずか400ドルで売却されたことが、後日の大事件の引き金となったこと
などのストーリーはなかなか理解できない様子だ。私の前のアベックは明らかに居眠りをしてた。こんな連中には、本作品のポイントになる次の筋書きも多分理解できていないだろう。すなわち

③ ロシアの核兵器の研究所があるアルザマズに勤務しているはずの科学者が3名いないことを発見したライアンが、これを質問したところ、怪しげな答えしか返ってこなかったこと

④ 彼ら3人の科学者は、実は某グループに自分達の目的達成のために連れていかれたこと

⑤ 某グループとは、かつてのヒトラーによる世界支配と同じことを夢想し、これに失敗したヒトラーと同じテツは踏まないという、世界支配のための「戦略」をもった、ネオ・ファシストのグループであること

⑥ 彼らの「戦略」とは、ヒトラーの時代は世界は広く大きかったが、今やインターネットのおかげで世界は狭くなったこと、従って巧みな情報操作によって恐怖の連鎖がお

こり、その「恐怖の総和」によって、米ソの核戦争の開始も可能となること

⑦ それによって米ソが共倒れすれば、筋書き通り、ネオ・ファシストによる世界制覇も可能なこと

もっともこの基本ストーリーやポイントがわかっているかいないか、若いアベックにしてみれば大きなお世話かもしれないが・・・。

<アメリカのまちボルチモアでの核爆弾の爆発>

このネオ・ファシストのグループの巧妙な工作により、あの29年前の、砂漠に埋もれていたアメリカ製の小型核爆弾は密かに、アメリカのボルチモアのまちに運び込まれ、スーパーボウルのスタジアム内の自動販売機にセットされた。このスタジアムは、今スーパーボウルの熱狂に包まれており、ファウラー大統領もそこにかけていた。その側にはキャボットもいた。観衆はヤンヤの喝采。キャボットもこの時ばかりは仕事を忘れて観客とともに試合に熱中。その熱狂のために何回も鳴らされていたライアンからのケイタイ電話をとるのも遅れてしまった。その結果・・・。

日本の広島と長崎での原爆投下に続いて、アメリカ合衆国にあるボルチモアのまちで原子爆弾が爆発した。しかも大観衆で溢れ返ったスタジアム内で・・・。スタジアムの上空はまっ暗となり、原子爆弾特有のあの「きのこ雲」が・・・。

ボルチモアに向かっていたライアンをのせたヘリも吹っ飛んだ。また、ライアンからの電話により一瞬早く危機を察知したキャボットは、大統領をリムジンに乗せて逃げていたが、核爆弾の威力は当然そのリムジンも転覆させた。幸い大統領は軽傷だったが、キャボットは・・・？

そして、ライアンの恋人で、ボルチモアの病院に勤務する若き女医キャシー（ブリジット・モイナハン）も当然この災難にまきこまれた。果たして彼女はどうなるのか・・・？

このスタジアムでの核爆弾の爆発以降、半分眠っていた若いアベックにもわかりに目を覚ましたようだ。映画終了後、「この場面で急に目が覚めた」と大声でしゃべりながら出ているアベックが数組いたこともきちんと報告しておかなくてはならないだろう。

<ライアンの行動は・・・？>

ところで、ライアンは何をしていたのか・・・？ライアンは、旧大統領の時代からロシアの次期大統領と目されていたネメロフは「主戦論者」ではないと分析していた。したがって旧大統領の急逝後、ネメロフが新大統領に就任した直後の、ロシアによるチェチェンの首都への毒ガスによる攻撃は、「ネメロフの指示ではない」、「ロシアの不平分子の手によるものだ」と主張した。しかしネメロフ大統領は、テレビで「チェチェン攻撃は自分の決

断だ」との声明を発表した。このためライアン意見はCIA内で一蹴されてしまい、ライアン意見は誰もが歯牙にもかけなかった。しかしさすがにCIA長官のキャボットは偉い。こんな分析をするライアンに、一目も二目もおいてこれを重用した。そしてライアンに対して、「自分のかわりに、ロシアで行方不明となった3人の科学者の行方をつきとめ、情報を持ち帰れ」と指示した。

ここで、007ばりのプロのスパイの工作員が登場する。リーヴ・シュライバー（ジョン・クラーク）だ。

この映画では脇役に甘んじているが、よく考えてみれば、このリーヴの働きがなければ、ライアンもキャボットも何もできないほどの重要な仕事を裏方でこなしている。

<米・ソ両大統領の神経戦>

ボルチモアのまちでの核爆弾の爆発。当然アメリカは、これをチェチェンでの毒ガス兵器使用に続いて、ロシアが直接アメリカへ手を下したものと判断した。この核爆発によりCIA長官キャボットを失い、自らも死の一步手前の経験をしたファウラー大統領だからなおさらだ。ファウラー大統領が言う「理性などクソくらえだ」とのちょっとガラの悪い発言も、わからないではない。したがって、全面核戦争への恐怖の気持ちを持ちつつ、アメリカもロシアも、「通常兵器→細菌兵器→核兵器」という攻撃パターンへ思考経路が一挙に傾いていったのも当然だ。さらに防御体制も、下級のレベルから次第にアップし、最高レベルまで進んでいった。これは、上級幕僚（スタッフ）達の意見を参考にしつつ、すべては大統領個人の決断。最終的に「核のボタン」が大統領一人の手に委ねられていることは、アメリカもロシアも同じだ（これに対比すると、日本の防衛、軍事システムの不十分さ、ええ加減さは明らかだ）。

スクリーンは、このようなアメリカとロシアの大統領同士の神経戦を大変な緊張感を保ちながら描く。もちろん、情報化社会の今、それぞれの大統領が下す各種の判断には、電話やパソコンで会話が出来るホットラインが大いに役に立っている。しかし、いくら電話があっても、またパソコンによってリアルタイムで文字が送られてきても、相手の気持ちの真意をはかるのは所詮人間だ。

その結果、双方の大統領は次第に攻撃の手段をエスカレートさせていく、そして当然ながら上級幕僚達の多くは大統領の判断に同調。軍部の幕僚は当然大統領の決断を促すように矢の催促をする。したがって大統領は〇〇の決断。次に△△の決断。そして最後に残るのは、核爆弾発射のボタンのみだ。それが数分後、そして今や、数十秒後に迫った。

<ライアンの最高の仕事そしてカケ>

ここでまた、ライアンは何をしていたのか？

ライアンはボルチモアの核爆発の現地（爆心地）に入り込んでいた。既にライアンは、スタジアムで爆発した核爆弾はロシア製ではなくアメリカ製であること、また、某人物がこれをロシアのウクライナの軍事基地からボルチモアに送ったことを知っていた。従って彼の最後の仕事は、この某人物を確認すること。そのためライアンは危険をかえりみず、今はすっかり破壊されつくしたスタジアムの中心部へと向かった。その途中ライアンは必死に大統領が乗る飛行機「エアフォース・ワン」にケイタイで連絡をとるが、上級幕僚はもはやライアンを受けつけない。

そこでライアンが最後にとった手段は・・・？国防総省（ペンタゴン）に乗り込んだライアンは、直接ロシア大統領ネメロフとパソコンで通信を交わした。そしてこれは当然アメリカ大統領ファウラーの目にも触れた。

ボルチモアのスタジアムで爆発した核爆弾はアメリカ製のものであったことをはじめ、正確な情報を伝えようと必死になるライアン。しかし他方でライアンは、それのみならず、「恐怖の総和」が全面的核戦争に向かわせることを心情的に強く訴えた。

そして……。攻撃を段階的に縮小することを提案したのは、ロシア大統領ネメロフ。世界いや地球は、C I Aの新米分析官ライアンの献身的努力によって救われたのだ。

そして……。

<エンディングのスマートさ>

今日はライアンとキャシーとの婚約の日。

C I Aはなぜかこの事実を把握しており、2人には祝福の指輪が……。

何ともしやれたエンディングだ。もう最高！充実した2時間余でした。

2002（平成14）年8月21日記